

教職免許取得課程学生の意識に対する因子 分析的研究 ―本学体育学部―

小森富士登 ・ 右田 重昭* ・ 中島 猷*

武内 政幸**・飯田 穎男***

A Factorial study of Image about Teacher Education Curriculum —For Physical education of Kokushikan University Students—

Fujito KOMORI, Sigeaki MIGITA, Takeshi NAKAJIMA,
Masayuki TAKEUCHI, Eio IIDA

目 次

- I. 緒 言
- II. 方 法
 - 1 質問紙の内容および調査方法
 - 2 被 検 者
 - 3 イメージの推定方法
- III. 結果と考察
 - 1 本学体育学部学生の教職に対する一般的意識
- IV. ま と め
 - 引用・参考文献

*国士舘大学 **大東文化大学

***共立女子大学

I. 緒 言

教員免許状を取得するには、大学の教職課程を履修することによって所定の教科の単位を取得し、教育職員免許法に規定する所用資格を満たして者は、各教育委員会に免許状の申請をすることができ取得可能になる。しかし、資格を取得できたからといって、即教育現場に立ち実際に教員として教育活動に就くことはできない。そこには、教員になるための資格審査があり、公立学校においては各都道府県の教員採用試験、私立学校においてもこのような審査があり一定の基準をクリアしなければならない。そしてさらに、採用が決定しなければ教員にはなれないのである。従って、この時点に到達するまでには教員として身につけてなければならない基礎的教養知識・専門的知識・教職技能などの多くの学問的知識はもとより、職業上の適性である教職適性等にも及んでくるのである。

東ら¹⁾によると「教職適性」とは、専門職としての教師のモラル・役割・行動の必要な範囲と望ましさの基準（＝教師の専門性）に照らして、ふさわしいとみなされる人格特性や行動特性をもった人間を査定するための概念であると定義している。しかし、教員の適性がこのように定義されていても、教職課程を履修している学生に、一体どこまでこの適性基準を判定することができるかは大変難しい問題である。大学においては、取得するであろう免許の専門的学問を主体に学習しているのが現状であり、これらは、教員として持たねばならない「教職適性」にまで及んでいないのではないかという批判も多くある。例えば、医師の資格を取得する場合のインターン制などのような一定の試用期間が設けられているわけでもなく²⁾、短期間の教育実習があるだけで、将来の自分を決定する教員としての資格を見いだすことは困難なことであろう。

伊津野³⁾は、教師としての適性や資質は教師の力量として判断できると思われるとしており、「教師の力量という場合、まず教師の人間的影響力ともい、

えるような人間的資質を度外視することはできないし、また教科指導・生活指導などのいわゆる指導力もその中に含まれる。従って、教師の力量とは、教師の資質能力という言葉におきかえることもできる。」としている。

「教育適性」については種々考え方があろうが、教育職員という職種については、人に教育を授けるという立場から、単に自分の専門とする学問的知識のみでは不可能であることは厳然たる事実であり、専門的学問知識の上に立ち、教師として持たなければならない多くの資質までも、意識の中に取り入れなければならないからである。教師を目指すために、自分の目的と合致している大学に入学し、教職課程を履修し教員資格を有したとしても、実際に教育実習などで教育現場を知るチャンスを体験する中で各々が自問自答し、時には第三者から適切な指導を受けたり評価してもらうことから、自分の進むべき道を探し求めることができるであろう。従って、大学へ入学する時点に持っている学問的意識と将来自分が進もうとしている職業が一致し、教育学を学び、教員免許状を取得し、教員になることを目指す道が開かれているならばこれ程良いことはないであろうが、四年間という大学で学ぶ時間的経過の中で、紆余曲折し様々な障害に妨げられてゆく可能性もあるのである。

このようなことから、教員を目指す学生がその資格を取得する課程において、どのような考え方がその意識構造として存在するかを把握しておくことは、指導者として指導理念確立のためにも重要なことと思われる。

本研究は、教職課程を履修し教員免許状の取得を目指している本学体育学部学生を対象に、どのような意識のもとに受講しているかその構造を明らかにし、今後の体育科指導のための基礎資料を得る目的で行なったものである。

II. 方 法

1) 質問紙の内容および調査方法

質問紙は、共立女子大学教職研究室（代表高嶋正士）のスタッフによって作成された質問紙を用いた。この質問紙は、学生教職希望者がどのような意

識を持ち希望し受講しているかの実態を把握する目的のもとに、2回の予備調査が行なわれた。その結果、得られた49項目について項目分析を行い、さらに経験的に、また先行研究より必要と思われる項目を収集選択し作成されたものである。

質問紙は次頁の表－1に示した。

質問項目は、免許取得希望・教職に対する職業観・教員志望・教職の魅力・免許取得課程の魅力の5つのカテゴリーに分類されている。

①免許取得希望は、

- (1) 私は、教員免許状をもつことが就職、その他に有利であると思う。
- (2) 私は、教員免許状がただなんとなく欲しいと思う（取れる資格は取っておきたい）。
- (3) 私は、教師の資格を持っていることは将来なにかに役立つと思う。
- (14) 私が教職課程を履修したのは、両親その他の人に勧められたからである。

の4項目である。

②教職に対する職業観は、

- (4) 私は、教師という職業は、女性（又は男性）にとって他の職業に比べて社会的にも、経済的にも安定していると思う。
- (6) 私は、教師という職業は一生涯打込めるやりがいのある（魅力的な）仕事であると思う。
- (19) 私は、最近の子供達（生徒）の考え方や行動に興味をもっている。
- (21) 私は、教師という職業は、比較的自由時間（休暇）が多いと思う。
- (22) 私は、教師という職業は、男女平等（給料など）であると思う。

の5項目である。

③教員志望は、

- (2) 私は、教師になることが小さい時からの夢でした。
- (8) 私は、中学や高校に在学中先生を尊敬し、また優れた教師の感化を受

表－１ 教職対する意識調査

学部・科	I部・II部	学科・専攻	学年・聴講生	男・女	県出身
取得見込免許教科 国語・英語・仏語・美術・工芸・家庭・数学・理科・社会・音楽・保健体育・その他（ ）					

下記の項目は教職過程を履修した動機について書いたものです。各項目を読んで、あなたの思っていることをありのままに答えてください。該当するところに○をつけてください。

非常に
あて
はまる

あて
はまる

あて
はま
らない

全
く
あて
はま
らない

- (1) 私は、教員免許状をもつことが就職、その他に有利であると思う。

--	--	--	--
- (2) 私は、教師になることが小さい時からの夢でした。

--	--	--	--
- (3) 私は、教員免許状がただなんとなく欲しいと思う（取れる資格は取っておきたい）。

--	--	--	--
- (4) 私は、教師という職業は、女性（又は男性）にとって他の職業に比べて社会的にも、経済的にも安定していると思う。

--	--	--	--
- (5) 私は、教師の資格を持っていることは将来なにかに役立つと思う。

--	--	--	--
- (6) 私は、教師という職業は一生涯打込めるやりがいのある（魅力的な）仕事であると思う。

--	--	--	--
- (7) 私は、子供と生活し、子供といっしょにすることが好きである。

--	--	--	--
- (8) 私は、中学や高校に在学中先生を尊敬し、また優れた教師の感化を受けてきたと思っている。

--	--	--	--
- (9) 私は、教師の仕事に興味や関心をおおいにもっている。

--	--	--	--
- (10) 私は、大学在学中に教育実習という体験（経験）をしてみたいと思っている。

--	--	--	--
- (11) 私が教職課程を履修したのは、学生生活に目標ができ、かつ勉学の励みになるからであると思っている。

--	--	--	--
- (12) 私が教職課程を履修したのは、たぶん可能性に挑戦し自分を試してみたかったからである。

--	--	--	--
- (13) 私が教職課程を履修したのは、母親（又は父親）になった時、自分の子供を育てるのに役立つと思うからである。

--	--	--	--
- (14) 私が教職課程を履修したのは、両親その他の人に勧められたからである。

--	--	--	--
- (15) 私が教職課程を履修したのは、自分の専門科目（体育・英語など）が好きで、好きな専門が続けられるからである。

--	--	--	--
- (16) 私は、教師の資格をもっていると社会に出てから信用され、認められると思っている。

--	--	--	--
- (17) 私は、教師として教えることは、自己の向上につながるものといつも思っている。

--	--	--	--
- (18) 私は、教師として人間の成長に関わっていきたいと思う。

--	--	--	--
- (19) 私は、最近の子供達（生徒）の考え方や行動に興味をもっている。

--	--	--	--
- (20) 私が教職課程を履修したのは、先生になりたかったからである。

--	--	--	--
- (21) 私は、教師という職業は、比較的自由時間（休暇）が多いと思う。

--	--	--	--
- (22) 私は、教師という職業は、男女平等（給料など）であると思う。

--	--	--	--

けてきたと思っている。

(16) 私は、教師の資格をもっていると社会に出てから信用され、認められると思っている。

(20) 私が教職課程を履修したのは、先生になりたかったからである。
の4項目である。

④教職の魅力は、

(7) 私は、子供と生活し、子供といっしょにすることが好きである。

(9) 私は、教師の仕事に興味や関心をおおいにもっている。

(15) 私が教職課程を履修したのは、自分の専門科目（体育・英語など）が好きで、好きな専門が続けられるからである。

(18) 私は、教師として人間の成長に関わっていききたいと思う。

の4項目である。

⑤免許取得課程の魅力は、

(10) 私は、大学在学中に教育実習という体験（経験）をしてみたいと思っている。

(11) 私が教職課程を履修したのは、学生生活に目標ができ、かつ勉学の励みになるからであると思っている。

(12) 私が教職課程を履修したのは、たぶん可能性に挑戦し自分を試してみたかったからである。

(13) 私が教職課程を履修したのは、母親（又は父親）になった時、自分の子供を育てるのに役立つと思うからである。

(17) 私は、教師として教えることは、自己の向上につながるものいつも思っている。

の5項目である。

これら計22項目からなる質問用紙では、それぞれの項目はランダムに配置されており、各項目について4段階評価尺度法（非常にあてはまる・あてはまる・あてはまらない・全くあてはまらない）によって調査を行なった。

2) 被検者

本研究の調査対象は、国士舘大学で教職課程を履修している学生で体育学部1年生39名・2年生40名・3年生48名・4年生41名の計168名を対象とした。調査期間は、平成4年10月に実施したものである。

3) 意識の推定方法

本研究では、教職に対する学生のイメージの構造を統計学立場から推定するための方法として因子分析法を用いることにする。ここで、本研究において用いた因子分析法について述べることにする。

因子分析 (factor analysis) は、1900年代の初めから心理学における統計学的手法として発達し、その後、医学・生物学・社会学・教育学等々広範囲の分野において応用されている^{4,7)}。そして、その根本的な思想は、“ある領域での一見複雑にみえる種々の現象も、極めて少数の潜在的因子 (latent factors) によって説明し得る” という、科学の根底に横たわる簡潔 (parsimony) の原則に基づいている⁶⁾。

因子分析について Comrey, A.L.⁴⁾ は、その著書の中で「多数の変量について相関行列が大きな値の相関係数を持っているということは、その中にある変量が相互に強く関連していることを示している。

変量が多くその間に多数の高い相関がある時は、さまざまの相互関係のあることが予想されるが、これをそのまま同時に考慮して考察することは非常に困難である。このような場合、因子分析は相関行列に見られる数値を説明するために潜在的な因子の存在を仮定したり、或いは因子という名の構造物を想定し、このような複雑な相互関係をできるだけ簡単な形で促える手段を提供するものである」と述べている。

また、松浦⁵⁾ は「ある種の能力を測定する諸テスト変数は、テスト結果として測定された成果にはいくつかのより単純な能力領域が関与していると考えられる場合が多い。この単純な能力領域を各テスト変数の関連 (相関係数、又は共分散) を手がかりとして見つけていく統計的方法の1つが因子分析法

といわれるものである」と述べている。

つまり、因子分析とは多数の変量間の相関をもとに、これを因子と呼ばれるいくつかの共通的なグループにまとめ、その構造を明らかにしようとするものである。

このような因子分析法も実際には、二因子解法 (two factor solution) ・二重因子解法 (bi-factor solution) ・セントロイド解法 (centroid solution) ・主成分解法 (principal component solution) ・主因子解法 (principal factor solution) ・多因子解法 (multipal group factor solution) 等の様々な方法がある。これらの中で、主成分解法 (principal component solution) は Pearan, K. によってその数学的基礎が発表されたが、その後、Hottelling, H. によって確立されたものである。この解法は、因子構造をいくつかの共通な因子で説明しようとするものであり、第1共通因子を全分散の可能な限り最大の程度に説明できるように抽出し、第2共通因子を残差の全分散の可能な限り最大の程度に説明できるように抽出する。以下、同様な方法で因子の抽出を繰り返す解法である。ここで変数の数と等しいだけの因子を抽出しようとするものをcomplete principal component solutionと言う。また、変数の数より少ない因子で因子構造を説明しようとするものをincomplete principal component solutionと言う。本研究で用いる因子分析法とは、この不完全主成分分析法をさすものとする。

不完全主成分分析法を用いるにあたり、その妥当性について検討を加えると、松浦⁵⁾は「因子分析の領域には、与えられた変数の中に含まれる共通な基礎的要素の数を推定し、その基礎的要素を解釈しようとする立場と、変数間の関連性から変数の数より少ない要素を見出し、その少ない要素で変数全体を説明し、かつその要素を積極的に解釈しようとする立場と、以上2つの立場がある。前者はcomponent solutionと言われる立場で、相関行列の対角線要素を1.0として、この相関行列を変数空間における各変数の配列の数的表現と見なすのである。この場合、この変数空間の次元は、相関行列の階数と等

しいものである。この変数を完全に説明するためには、相関行列の階数に等しいだけの成分 (component) が必要である。このように、相関行列の階数に等しいだけの成分を抽出しようとするものを complete component solution という。これに対して、相関行列の階数より少ない成分で相関行列を説明しようとするものを incomplete component solution という。後者の方が実際的には必要なものである。すなわち、全分散の70ないし80%を説明するには、いくつかの成分が必要なのかを推定し、その数に相当する成分を解釈せんとするのが incomplete component solution である」と述べ、さらに「この incomplete component solution は、厳格な数学的根拠をもつ方法の一つである」と指摘している。

以上の指摘をふまえ、本研究では不完全主成分分析法を用いた。

調査後回収された資料により

非常にあてはまる 4
あてはまる 3
あてはまらない 2
全くあてはまらない 1

として調査内容を得点化し、その得点についてそれぞれの相関行列 (22×22) を計算し不完全主成分分析 (incomplete principal component solution) を施し、固有値が1.0以上の主成分について、ノーマル・バリマックス (normal varimax) 基準による直交回転を適用して多因子解 (multiple factor solution) を求めた。なお、今回は相関係数を算出するにあたり、その過程において平均値・標準偏差を算出したが、本研究の調査方法である4段階評価においては、その意味づけが明確でないので、それについては言及しない。

本研究で必要な計算は、NECパーソナルコンピューター・PC9801DSにて行った。

4) 本大学・本短大の教職課程を履修する学生の現状

本大学・本短大において取得できる教育職員免許状の教科と種類は、表一

表-2 相關係數行列

N=168

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
1	1.000																					
2	.263	1.000																				
3	.106	-.003	1.000																			
4	.262	.239	.253	1.000																		
5	.596	.272	.102	.382	1.000																	
6	.215	.515	-.003	.340	.229	1.000																
7	.211	.455	-.015	.239	.271	.536	1.000															
8	.221	.462	.022	.226	.251	.463	.495	1.000														
9	.363	.581	-.032	.344	.483	.617	.514	.534	1.000													
10	.261	.402	-.047	.191	.291	.457	.462	.467	.527	1.000												
11	.304	.444	-.048	.273	.417	.482	.469	.417	.558	.457	1.000											
12	.142	.444	.073	.243	.183	.315	.310	.331	.388	.346	.592	1.000										
13	.076	.353	.256	.195	.083	.290	.252	.318	.223	.223	.458	.530	1.000									
14	.079	.250	.265	.242	-.016	.084	.036	.087	.097	-.043	.222	.286	.335	1.000								
15	.194	.464	-.111	.147	.244	.283	.252	.313	.433	.368	.406	.355	.184	.182	1.000							
16	.355	.328	.218	.205	.292	.259	.232	.290	.292	.194	.307	.176	.269	.306	.363	1.000						
17	.435	.389	.024	.347	.424	.368	.327	.383	.504	.420	.387	.244	.028	.101	.433	.427	1.000					
18	.386	.513	-.037	.316	.397	.475	.379	.412	.562	.439	.477	.305	.185	.172	.523	.428	.614	1.000				
19	.276	.477	-.043	.261	.272	.330	.358	.314	.357	.308	.424	.348	.371	.249	.356	.396	.343	.565	1.000			
20	.284	.604	-.007	.220	.382	.560	.395	.453	.641	.525	.538	.374	.195	.194	.559	.405	.550	.623	.387	1.000		
21	.054	.054	.059	.222	.059	-.012	-.071	.004	.040	-.042	-.057	-.062	-.034	.104	.089	.061	.030	-.021	-.044	1.000		
22	.183	-.027	-.129	.084	.203	-.110	-.101	-.064	.018	.209	.091	.027	-.085	-.075	.132	-.018	.149	.172	.285	.076	.059	1.000

表－３ 本学で取得できる教員免許状の教科と種類

学 部	学科・専攻		教科及び免許状
政経Ⅰ部	政 治		地理歴史・公民（高校）／社会（中学）
	経 済		地理歴史・公民・商業（高校）
	経 営		社会（中学）
法 学	法 律		公民（高校）／社会（中学）
文 学	教育	教 育 学	地理歴史・公民・保健体育（高校）／社会・保健体育（中学）
		倫 理 学	地理歴史・公民（高校）／社会（中学）
		初 等 教 育	小学校・幼稚園
	史学 地理	国 史 学	地理歴史（高校） 社会（中学）
		東 洋 史 学	
		地 理 学	
	文学	中 国 文 学	国語・書道（高校）／国語（中学）
		国語国文学	
工 学	機 械 工		数学・工業（高校）
	電 気 工		
	土 木 工		数学（中学）
	建 築		
体 育	体 育		保健体育（高校）／保健体育（中学）
政経Ⅱ部	政 治		地理歴史・公民（高校）／社会（中学）
	経 済		地理歴史・公民・商業（高校）／社会（中学）
短期大学	国 文		国語（中学２種）

学校法人国士館教務部入学課発行「DATA」¹⁰⁾より作成。

３のとおりである。教職課程が設置されている学部は、政経学部（Ⅰ・Ⅱ部）・法学部・文学部・工学部・体育学部の６学部と短大の国文科であり、文学部教育学科初等教育専攻と短大国文科を除いた学部の学科では、中学校・高等学校教諭の免許状が取得でき、文学部教育学科初等教育専攻においては、小学校・幼稚園教諭免許状、短大国文科においては、中学校２種教諭の免許状の取得ができる。

表－４ 本学の教員免許状一括申請実員数

学 部	学科・専攻		平成 1 年	平成 2 年	平成 3 年	平成 4 年	平成 5 年
政経Ⅰ部	政 治		12名	13名	18名	10名	11名
	経 済		33名	24名	12名	17名	13名
	経 営		16名	21名	17名	14名	4名
法 学	法 律		37名	21名	18名	23名	19名
文 学	教育	教 育 学	74名	64名	62名	55名	62名
		倫 理 学	15名	19名	7名	4名	3名
		初 等 教 育	73名	79名	72名	63名	64名
	史学 地理	国 史 学	34名	28名	24名	22名	14名
		東 洋 史 学	8名	13名	9名	5名	7名
		地 理 学	11名	4名	1名	10名	9名
	文学	中 国 文 学	6名	5名	7名	6名	8名
		国語国文学	38名	42名	32名	24名	35名
	工 学	機 械 工		4名	1名	0名	5名
電 気 工		10名	2名	0名	0名	0名	
土 木 工		17名	5名	0名	8名	2名	
建 築		12名	3名	2名	0名	2名	
体 育	体 育		272名	233名	239名	253名	190名
政経Ⅱ部	政 治		9名	11名	9名	8名	8名
	経 済		24名	10名	4名	11名	9名
短期大学	国 文		61名	48名	22名	33名	19名
大 学 総 計			705名	598名	533名	538名	460名

学校法人国土館教務部調査⁹⁾より作成。

そこで、最近５年間における本大学・本短大学生の教員免許状の取得者数を調査したのが表－４である。今回の調査対象が体育学部の学生であり、体育学部の教員免許状の取得率と教育関係就職者数を調査したのが表－５である。この表－５では、就職者数の若干の不明はあるが、平成５年度においては、免許取得者数190名・取得率69.3％と平成４年度までと比較してかなり低

表－５ 教員免許状の取得率及び教育関係就職者数（体育学部）

年 度	卒業者数	免許取得者数	免許取得率（％）	大学	高校	中学	社会教育	講師	その他	合計
平成元年	281	272	96.8	2	16	2	8	不明	不明	28
平成２年	259	233	90.0	1	13	9	5	40	不明	68
平成３年	260	239	91.9	1	15	7	13	54	不明	90
平成４年	289	253	87.5	2	9	11	12	64	1	99
平成５年	274	190	69.3	0	7	3	8	14	2	34
合 計	1363	1187	87.1	6	60	32	46	172	3	319

国士舘大学就職センター発行「就職に関する報告書」⁸⁾より作成。

下している。また、教育関係就職者数も34名と少なくなっている。このことは、小学校・中学校・高等学校等の生徒数の減少により教員採用人数も減少を伴い、採用試験合格率も低下し、教職課程を履修する学生が減少した。或いは、途中で履修を中止したのではないかと推察される。

Ⅲ．結果と考察

１）本学体育学部学生の教職に対する一般的意識

本大学における教職免許取得希望学生の中で、今回の研究の対象となった体育学部保健体育免許希望学生168名について、方法３からの推定の結果、表－６の抽出された回転後の因子負荷行列にみられるように８因子が抽出され、第１因子から第８因子までの全分散に対する累積貢献度は53.268%であった。ここでは因子負荷量が0.4以上を有意とした。

第１因子

第１因子の全分散に対する貢献度は22.852%であり、因子負荷量が0.4以上のものの項目を因子負荷量の高いものから順に列举すると

（９）私は、教師の仕事に興味や関心をおいにもっている。(0.764)

(20)私が教職課程を履修したのは、先生になりたかったからである。(0.751)

表－ 6 回転後の因子負荷行列（保健体育教職希望者全員 N＝168）

項目 因子	1	2	3	4	5	6	7	8	共通性
1			0.631						0.497
2	0.652								0.582
3					0.452				0.367
4							0.511		0.462
5			0.717						0.622
6	0.717								0.606
7	0.610								0.519
8	0.608								0.459
9	0.764								0.706
10	0.598								0.554
11	0.518	0.537							0.659
12		0.650							0.565
13		0.697							0.586
14									0.406
15	0.517								0.508
16					0.504				0.486
17	0.560								0.578
18	0.626			0.410					0.668
19				0.613					0.614
20	0.751								0.702
21									0.171
22									0.404
貢献量	5.027	1.788	1.599	0.994	0.874	0.577	0.566	0.300	
貢献度	22.852	8.127	7.266	4.520	3.970	2.620	2.548	1.548	
累積貢献度	22.852	30.979	38.245	42.765	46.735	49.356	51.903	53.268	

- （6）私は、教師という職業は一生涯打込めるやりがいのある（魅力的な）仕事であると思う。（0.717）
- （2）私は、教師になることが小さい時からの夢でした。（0.652）
- （18）私は、教師として人間の成長に関わっていきたいと思う。（0.626）
- （7）私は、子供と生活し、子供といっしょにすることが好きである。（0.610）
- （8）私は、中学や高校に在学中先生を尊敬し、また優れた教師の感化を受

けてきたと思っている。(0.608)

(10) 私は、大学在学中に教育実習という体験（経験）をしてみたいと思っている。(0.598)

(17) 私は、教師として教えることは、自己の向上につながるものと思っている。(0.560)

(11) 私が教職課程を履修したのは、学生生活に目標ができ、かつ勉学の励みになるからであると思っている。(0.518)

(15) 私が教職課程を履修したのは、自分の専門科目（体育・英語など）が好きで、好きな専門が続けられるからである。(0.517)

の11項目が抽出された。(7)(9)(15)(18)は教職の魅力、(2)(8)(20)は教職志望、6は教職に対する職業観、(10)(11)(17)は免許取得課程の魅力に関する項目であるが、いずれの項目とも教師になることや教職免許取得に対する強い願望がみられることから、この因子を「強い教員志望因子」と解釈した。

第2因子

第2因子の貢献度は8.127%であり、有意の項目を列挙すると

(13) 私が教職課程を履修したのは、母親（又は父親）になった時、自分の子供を育てるのに役立つと思うからである。(0.697)

(12) 私が教職課程を履修したのは、たぶん可能性に挑戦し自分を試してみたかったからである。(0.650)

(11) 私が教職課程を履修したのは、学生生活に目標ができ、かつ勉学の励みになるからであると思っている。(0.537)

の3項目が抽出された。(13)(12)(11)ともに免許取得課程の魅力に関する項目であり、この因子を「免許取得課程の魅力因子」と解釈した。

第3因子

第3因子の貢献度は7.266%であり、有意の項目を列挙すると

(5) 私は、教師の資格を持っていることは将来なにかに役立つと思う。

(0.717)

(1) 私は、教員免許状をもつことが就職、その他に有利であると思う。

(0.631)

の2項目が抽出された。(5)(1)ともに免許取得希望の項目であり、この因子を「免許取得希望因子」と解釈した。

第4因子

第4因子の貢献度は4.520%であり、有意の項目を列挙すると

(19) 私は、最近の子供達(生徒)の考え方や行動に興味をもっている。(0.613)

(18) 私は、教師として人間の成長に関わっていきたいと思う。(0.410)

の2項目が抽出された。(19)は教職に対する職業観、(18)は教職の魅力の項目であるが、どちらの項目とも人間の成長ということに関連性があると考えられ、ここでは(19)に注目して、この因子を「保健体育の教職に対する職業観因子」と解釈した。

第5因子

第5因子の貢献度は3.970%であり、有意の項目を列挙すると

(16) 私は、教師の資格をもっていると社会に出てから信用され、認められると思っている。(0.504)

(3) 私は、教員免許状がただなんとなく欲と思う(取れる資格は取っておきたい)。(0.452)

の2項目が抽出された。(16)は教員志望。(3)は免許取得希望であるが、ここでは(16)に注目して、この因子を「教員志望因子」と解釈した。

第6因子

第6因子は有意な負荷量が抽出されなかったので「解釈不能」としておくことにする。

第7因子

第7因子については、(4) 私は、教師という職業は、男性(又は女性)にとって他の職業に比べて社会的にも、経済的にも安定していると思う。の1

項目のみに有意な負荷量を示したが、通常の解釈にあたっては、単一の項目からその因子を定義するのは非常に困難であり、かつ正しく解釈されたかどうかについても明確なものではないので「解釈不能」とした。

第 8 因子

第 8 因子は有意な負荷量が抽出されなかったので第 6 因子と同様に「解釈不能」としておくことにする。

この結果、本学における保健体育教職課程免許取得希望者の教職に対する一般的意識は、

第 1 因子 強い教員志望因子

第 2 因子 免許取得課程の魅力因子

第 3 因子 免許取得希望因子

第 4 因子 保健体育の教職に対する職業観因子

第 5 因子 教員志望因子

第 6 因子 解釈不能

第 7 因子 解釈不能

第 8 因子 解釈不能

という因子から構成されていた。

以上、これまで探索的な意味あいから 8 個の因子すべてについて実験的に解釈を試みたが、第 1 因子の貢献度は 22.852% で全分散に対する累積貢献度 53.268% に対し高い説明をしている。第 2 因子は 8.127%、第 3 因子は 7.266%、第 4 因子は 4.520%、第 5 因子は 3.970% であり、第 1 因子から第 5 因子までの累積貢献度は 46.735% であり以上の 5 因子が、抽出され解釈された 8 因子で説明される分散の 87.7% を説明しており、仮定された領域において注目される因子であると推察される。このことは、過去 5 年間の保健体育免許取得率の平均が 87.5% を示していることに関連があるものと推測される。また、本被検者は教職に対する適性を理解し努力できる学生達であると考えられる。

IV. まとめ

本学体育学部体育学科学生168名を対象に、教職に対する意識調査22項目について調査を行い、因子分析的手法を用いて意識の構造について検討した結果、次の結論が得られた。

1. 本学体育学部体育学科学生の教職に対する一般的意識について、次の8因子が抽出された。

第1因子 強い教員志望因子

第2因子 免許取得課程の魅力因子

第3因子 免許取得希望因子

第4因子 保健体育の教職に対する職業観因子

第5因子 教員志望因子

第6因子 解釈不能

第7因子 解釈不能

第8因子 解釈不能

2. 第1因子から第5因子まででその累積貢献度は46.735%であり、抽出され解釈された8因子で説明される分散の87.7%の高い説明力を有し、注目される因子と考えられる。

3. 本被検者は、体育学部体育学科の専門的視野から学習し教職に対する意識は、免許取得課程の魅力・免許取得希望・保健体育の教職に対する職業観等の教職に欠かせない適性を会得し努力できることが推測される。

引用・参考文献

- 1) 東 洋、梅本堯夫、芝 祐順、梶田叡一編集：「現代教育評価辞典」金子書房、pp.198-199、1988.
- 2) 同上書、pp.195-196.
- 3) 伊津野朋弘編、東京学芸大学教師教育研究「未来に生きる教師」エイデル研究所、p3.
- 4) Comrey, A.L. 芝祐順訳：「サンエンスライブラリー統計学12、因子分析入門」エイエンス社、p.1-4、1980.
- 5) 松浦義行：「行動科学における因子分析法」不昧堂、p.90-106、1972.
- 6) 奥野忠一、久米均、芳賀敏郎、吉沢正：「多変量解析法」日科技連出版社、p.323、1983.
- 7) 清水利信、斉藤耕二：「因子分析法」日本文化科学社、p.1、1972.
- 8) 学校法人国士館就職センター編：「就職に関する報告書」平成元年度～平成5年版.
- 9) 学校法人国士館教務部調査資料.
- 10) 学校法人教務部入学課発行：「DATA」